

「非文明」の作法

－ 日本列島東北部の先史時代研究から －

高瀬 克範

はじめに

1. 問題の所在

2. 研究の動向

3. 「非文明」の作法

おわりに

— 要 旨 —

先史時代研究のなかで、通事的な多様性のみならず、共時的な多様性までも優劣関係のもとに評価してしまう価値観は、たとえ顕在的ではないとしてもいまなお息づいている可能性が高い。こうした評価軸のなかでは、決して積極的な位置づけがあたえられないことがない地域は必ず存在しており、そうした歴史を偏見や差別、一方的な価値観の押しつけを排しながら、いかにして取り扱ってゆくべきかはいまだ解決していない大きな課題といえる。ここでは、「非文明」の評価をめぐる問題を作法としてまとめ、「文明」研究とはことなる注意点についての覚書きとした。

「非文明」をとりあつかう際の姿勢としてまず指摘されるのは、一国史の枠組みを対象化し、それとの距離のとりかたに慎重になることである。さらに、「文明」中心の歴史叙述のなかで常識化してきた、「文明」にとって都合がよい論理に疑問を呈してゆく批判的な態度も必要である。こうした姿勢がないかぎり、「文明」を中心とした価値観のなかに埋もれた「非文明」の正当な歴史的価値を引き出すことは非常に難しくなってしまう。

つづいて、「非文明」を扱う際の手法として指摘されるのは、物質文化の定性的な側面のみならず定量的な側面にも十分な配慮を行うこと、さらに、モノの系統性に引きずられた解釈をおこなうのではなく、実用的機能・社会的機能をふくめて、それぞれの時期・地域で機能・用途論的な分析をともなっていることである。これらは「文明」についてもあてはまるが、「非文明」では両者への十分な配慮を怠ると誤った判断を誘発しやすいという点で重要な意味を持っている。

受付：2004年1月5日

受理：2004年7月14日

キーワード

対象時代 弥生時代，続縄文期

対象地域 日本列島東北部

研究対象 非文明，歴史観

はじめに

ここでは、「文明」に対して周縁化されてきた「非文明」の取り扱いについて、無理を承知で手短かに考えてみることにしたい。

ここでいう「文明」と「非文明」の区別は絶対的な基準に基づくものではなく、あくまでも相対的なものである。それは、先史時代をもふくむ歴史の記述が何をめざし、何に依拠しているかによって自ずと決まってくる。先史時代の歴史すらも日本史のなかに位置づけられ、たとえ潜在的であるとしても進歩史観的な評価軸に依拠して描かれることが多い日本考古学のばあい、日本列島の内部においても「文明」や「文明化」への論及が指向されることとなる。しかし、それが当初から広域にわたって均質に認められるわけではない以上、「非文明」もまた「文明」と同時に生み出されつづけてきたのである。

このような枠組みに対してどのような態度をとるかは、研究者の自由である。だが、「文明」を至高の存在とする価値観が実際に生み出してきた弊害が存在していることも確かであり、どのような立場にたつにせよ、そうした問題点や危険性は認識しておく必要はあるだろう。

筆者は、この点を放置することによって、近い将来、先史考古学が自らの役割や存在理由すらも見失ってしまうことを恐れている。現状に追随するのではなく、それを批判的にとらえることが歴史学のひとつの役割であるならば、いま感じとられる兆候をあえて指摘し、それにもとづいて今後の方向性や検討項目について考えることは無駄な作業ではないだろう。ここではとくに日本列島東北部の弥生・縄文期研究についてとりあげるが、筆者の思いこみや曲解があるならば、そこにはむしろ積極的に批判を加えていただければ幸いである。その結果、ここで記した憂慮や危機感が杞憂であることが明らかになるのであれば、それは筆者にとっても望ましい結果となるからである。

1. 問題の所在

近代西欧的な価値観において発展・進歩とみなされる歴史的な変化、たとえば、生産経済の開始や社会階層化、複雑な分業体制の形成や国家の成立こそが語るべき価値があるとする思考様式は、通時的のみならず共時的な多様性さえも優劣関係に変換してしまう、いわば「序列化の価値観」とでもいうべきものである。

こうした価値観が日本考古学に少なからず根を下ろしてきた要因を考えると、たんに戦後の史的唯物論の導入と関連づけるだけでは不十分であろう。戦前の皇国史観、天皇制イデオロギー、植民地主義も、「序列化」とそ

の正当化という意味では類似した機能を有しており、戦後の考古学の理論的基盤やその定着過程も、こうした歴史的経緯との関係ぬきには考えることができないからである(岡安 2001)。また、新進化主義の影響も考慮されなければならないが、これが社会進化論的な図式的理解にいまなお大きな影響を及ぼしていることも確かであろう。

そうした経緯の詳細は今後、機会をあらためて検討されなければならないが、少なくともこのような評価基準においては、日本列島東北部や南島の先史時代史は決して救われることはなく、国家成立期あるいは近代に至るまでそこに積極的・肯定的な評価があたえられることがないことは確かであろう。そればかりか、国家が形成されないすべての地域の歴史は、発展から取り残されたまま闇のなかに葬り去られるか、後進的・停滞的な位置に固定されたまま差別の対象となるほかないのである。

日本列島東北部との関連でいえば、「序列化の価値観」はいま大きく2つの側面から問題が顕在化しつつあるように思える。第1点は、広瀬和雄氏(広瀬 1993, 広瀬編著 1997)による「東北型弥生文化論」や藤尾慎一郎氏(2000, 2003)による「弥生文化」の範囲の規定にみられるように、「文明」の側から「非文明」を区別・線引きし、差違化しようとするうごきが活発化している点である。ここでは、日本列島西南部において達成された「文明化」の度合いを測定するために、中国大陸や朝鮮半島をいわば「正の鏡」とする参照基準が導入され、水稲耕作の導入と社会階層化、それに関わる道具の生産・流通・使用、金属器製作・使用をはじめとする技術の革新、農耕の開始による精神世界の変化などが重視されている。その反面、日本列島東北部が「負の鏡」として積極的に利用されており、それとの差違を強調することで、日本列島西南部の発展を浮き彫りにしようとする意図も働いていると考えられる。

第2点は、「文明」を至高の価値観とするあまり、それへのあてはめを無理に行ってしまう、本来注視すべき個性が捨象・隠蔽されながら「文明」の縮小再生産がくり返されている点である。これは、研究者の専門や居住地とは関係なく認められるものであり、後述するように日本列島東北部を専門とする研究者にも多く認められる。発展への参画をめざして「文明」へ迎合する姿勢は、ある意味で身勝手である。「とりのこされた者」への配慮を欠かさないというのであれば話はべつであるが、そうした例はほとんどないのが現状であるからだ。

もちろん、このような「序列化の価値観」の強調だけでは日本考古学の評価は一面的にすぎるし、近年ではこうした結論が前面に押し出される例が非常に少なくなっていることにも注意しなければならない。しかし、決して皆無となっているわけではなく、研究者自身が明確には意識していないところで優劣の評価や差別を露呈させる

結果を招いている例はむしろ目立ってきている。このことは、そうした価値観が依然として対象化されておらず、さまざまなレベルで先史時代を評価するための潜在的な基準として内面化され、息づいていることを示しているのではないか。しかも厄介なことに、それは「弥生文化」の多様性論など、あたかも中立的・客観的な価値基準を装った相対主義によって覆い隠されることで、余計に見えづらくなっているともいえるのである。

「弥生文化」内の多様性を強調する現在の研究は、ごく一部をのぞいて、単に違いを違いとして指摘しているにすぎず、その違いを評価するための具体的な論理を用意しているわけでは必ずしもない。バブル経済期以降に隆盛してきたこのような無防備な多様性論が、「序列化の価値観」に飲み込まれてしまうのは時間の問題であろう。経済的にも精神的にも余裕がなくなる情勢のなか、今後、全体性の論理や多数派の意見が優先され、少数派や弱者が顧みられない風潮が強まってくる可能性がたかいからである。残念ながら、現在の日本や一部自治体の政策をみると、こうしたうごきはすでに現実のものになりつつあることを感じざるを得ない。

先史考古学においても今後、本州島東半部、続縄文期の北海道島、後期貝塚時代の南島などは、本州島西半部・四国島・九州島などとの差違がますます強固にはかられ、ふたたび後進性という評価が押しつけられてくる可能性は否定できない。これと連動して、日本列島西南部は、朝鮮半島や中国大陸との関係や共通性が強調されてくるとも思われる。こうした思潮が国家や民族などとむすびつくとき、国家主義的な言説やさまざまな差別・偏見に火がつく危険性があることは十分に認識しなければならない。また、新納泉氏(2004, 3頁)や松室孝樹氏(2004, 55-56頁)が憂慮しているように、「前方後円墳国家論」(広瀬 2003, 2004)などは発言者の意図とはべつに危険な方向に利用されてゆく可能性もあり、近年の高精度放射性炭素年代測定なども、それ自体の評価はもとより、その成果が歴史叙述のなかでどのようにとり扱われているかにも監視の目を光らせておく必要はある。

先史時代像と現在の研究者・国家・地域などが結びついてしまうことがより根本的な問題なのだが、そうした政治性を否定することをここで目的としているわけではない。むしろ、そこは前提としたうえで、「非文明」や少数派の歴史を、「文明」の論理とはことなるかたちで評価することの必要性を認識したいのである。もちろん、これによって「非文明」を「保護・救済」しようなどというのは権力性を背景とした研究者のおごりにすぎず、筆者にできるのは、これまでの枠組みに疑問を呈し、自らの先史時代の語り方を相対化し、問い直してゆくことでしかない。

2. 研究の動向

(1) 本州島東北部

「文明」中心の歴史叙述によって覆い隠されてきた「非文明」の歴史を「回復」する必要性は、すでに小川英文氏(1998, 2000)が指摘しているところである。東アジアの脈絡でいえば、中国大陸における発展の道筋が手本とされ、その周辺で図式の追従がいつ、どの程度生じているかが問題とされてきている。もちろん細部の地域性に目を向けた研究も存在しているが、日本列島西南部がもつ「非文明」としての側面の研究に着手されたのはつい最近のこととあってよいであろう。大枠としては、図式に適合的な部分が重視され、物質文化や技術がいつ、どの程度あたらしいものに置き換わり、それによっていかに効率性・合理性や規模のうえで発展がもたらされたのかに主たる関心が向けられてきた。このような「文明」の作法も、人類史の理解にとっては非常に重要な役割を果たしていることは疑いない。しかし、「文明」の作法による評価だけではなく、そこからはずれる部分にも異なる角度から光を当てるための研究手続き上の仕掛けを設けることが必要なこともたしかであろう。

「かつて縄文文化の高度な繁栄をほこった東日本も、稲作の波及のもとに、経済的劣勢と文化的従属の位置に転じ、以後その後進性は、長期にわたって克服されないまま、西方に政治的関係が発展するころには、決定的となる」とは、近藤義郎氏(1966, 447頁)の言である。この背後には、水稲耕作が無条件に優れているという前提や、弥生時代以降の日本列島東北部の歴史がとるにたらない、もしくは副次的な意味しかもたず、それゆえに日本列島西南部の「優れた歴史」を重視しなければならないのだとする意識が読みとれる。

また、佐原真氏(1975)が執拗なまでにヨーロッパとの対比を試みながら弥生時代を論じたのも、「第一次新石器文化」としての日本列島西南部と、「第二次新石器文化」としての本州島東部を区分し、同時に前者の歩調がヨーロッパの「発展の図式」とよく合致することをしめそうとする意図が働いていたためとも考えられる。そこでは、日本列島の特徴を浮き彫りにするために比較という手法がとられたというよりは、ヨーロッパの歩調との共通性に力点がおかれた記述になっているからである。

両氏の議論はいうまでもなく、「西日本」の評価としてはひとつの「到達点」とでもいうべき重要性をもつものである。しかしその一方で、「東日本」の取り扱いについては、問題を放置し、逆に助長する結果をも招いているのではなからうか。字数制限や論文のテーマ設定など現実的な問題はあるにちがいない。しかし、「東日本」と「西日本」の線引きをあえて行っている以上、「西日本」のみ

に着目し、「東日本」を放置あるいは軽視することは、それ自体が「東日本」に対する一面的な評価の押しつけになってしまうことには注意を要する。

議論を、より日本列島東北部に引きつけてみよう。筆者は、現在の本州島東北部の弥生時代研究には、大きく2つの流れがあると認識している(高瀬 2004)。1つは、「日本列島西南部と同一歩調」というテーゼのもと、本州島東北部でも同じような発展が達成されたことを強調する立場である。2つめは、「弥生文化」内部の多様性をみとめたうえで、本州島東北部の個性を強調してゆく立場である。前者を同一化アプローチ、後者を差違化アプローチとよんでいるが、ここでいう同一化や差違化の基準となっているのは、ほかでもなく日本列島西南部である。弥生時代研究のなかでは基準としての日本列島西南部の優位性は崩れておらず、本州島東北部の弥生時代像も、それと「亀ヶ岡文化」にはさまれた狭隘な空間においてのみその輪郭が捉えられてきており、そこを抜け出すことは決してなかったのである。

同一化アプローチは、本州島東北部を「発展の図式」に参画させることを最大の目的としている。いかに日本列島西南部に近い物質文化がみられるか、いかに同一歩調で発展しているかを強調し(伊東 1979, 1984, 須藤 1998)、逆に北海道島との差違を見逃さない。「文明」の至高性を承認したうえでそれへの帰属意識を内面化した研究姿勢といえるが、日本列島西南部との共通性を強調するために物質文化のみで地域の地域性に配慮することはあっても、日本列島西南部との社会のうえでの違いが顕在化するのをむしろ回避する傾向がある。また、北海道島を犠牲にすることで本州島東北部を「救済」しようとする姿勢は、日本列島西南部が日本列島東北部にむけてきたまなざしと質的に変わるものではない。

対照的に、差違化アプローチにおいては日本列島西南部との違いに積極的に眼がむけられる。しかし、そこで本州島東北部を評価するために用いられているのは、まさに「文明」の作法にほかならない。縄文的な物質文化のリストが、日本列島西南部を基準とした弥生的な物質文化リストにいかに置き換えられてゆかが焦点となっているのであり、結果として「水田稲作は伝播してきたものの、道具をはじめとする基本的な生活スタイルは縄文時代の伝統をそのまま受け継いでいた」(禰亘田 1998, 63頁)、という停滞的な結論へと収斂してくるのである(広瀬 1993, 広瀬編著 1997, 禰亘田 1993)。

これと同時に、日本列島東北部内部におけるよりミクロな地域間の「序列化」にも敏感になっておく必要がある。石川日出志氏(2000, 85頁)は、弥生時代の本州島東半部を3つの地域に分け、本州島東北部をさす「第1の地域」について「縄文伝統をじつに明瞭に持続することが明らか」と述べている。この見解は、集落・墓制・石器

組成・続縄文土器の分布などを、極めてよく整理したうえで結論である。しかしその一方で、物質文化の系統的な連続性や定性的な特徴ばかりが強調されている点には注意が必要であり、それを製作・使用した社会に変化が生じていたかどうかを探る視点がはじめてから欠落している点も見逃すことはできない。

集落については秋田県地蔵田遺跡がとりあげられ、数棟の円形の竪穴住居が柵で囲われている姿をもとに、縄文晩期以来の集落形態・規模が保持されていると述べられている(石川 2000, 70-72頁)。しかしながら、縄文晩期の集落との比較作業がともなっておらず、住居や集落構成員の規模がほんとうに縄文晩期と同じなのかを確認されているわけではない。実際に比較を行えば、そこに居住した人びとの規模と組織のされ方が縄文期と同じと考えることには相当な無理が生じるし、遺跡群の動態をみても小規模・分散化を貫き通した「亀ヶ岡文化」と違いないとするのは難しいはずである(高瀬 1999, 2000, 2003 b, 2004)。

墓制も、土坑墓と土器棺から構成される点ではたしかに縄文期と共通するが、そこで類遠賀川系の土器棺が多用されるようになる意味を考える必要があるだろう。筆者はこれを、従来の村落組織の理念的な強化に関係するものと捉えているが(高瀬 2004)、この理解の是非はべつとしても、土器棺の「有り無し」だけでは捕捉しえない変化が生じている可能性をはじめてから排除してよい理由は見あたらない。また、石器組成が縄文期と共通する点も強調されているが(石川 2000, 72頁)、器種の組合せと石器が実際にどのように利用されていたのかはまったくべつの問題であろう。

このほか、「続縄文土器・集団」の南下をもって本州島東北部の北部は「続縄文世界」に変わり、それゆえに「縄文伝統」がのこるのだともされているが(石川 2000, 85頁)、この発言は「続縄文」の均質かつ停滞的な理解を前提としたものとして受け取られかねない。筆者は、続縄文前半の社会を支える価値観は、縄文期の北海道島とも弥生期の本州島東北部とも異質なものであり、続縄文後半に生じる資源利用と居住形態の変化も、弥生・古墳並行期の歴史的状況の中で形成されてきたものと考えている(高瀬 2003 a)。このあたりの具体的事情を明らかにすることこそが課題なのだが、実際には物質文化の系統的な連続性にとらわれた解釈によって、多くの歴史が覆い隠される結果となっている。

このような「第1の地域」の理解は、じつは「南関東に西方世界が出現したといっても過言ではない」(石川 2000, 85頁)と表現される「第3の地域」、つまり関東平野の評価と関わっている可能性がある。すなわち、中里遺跡の調査成果などからうかがえる弥生中期以降の「先進性」を浮かびあがらせようとする意識が、「第1の地域」

の停滞的な位置づけにも影響を与えていないという保証はないのではないか。文章全体の脈絡からは石川氏の意図が、「縄文」の停滞性を強調するところなどには決してなかったことは明白である。しかし、それと対照的なかたちで関東平野の「先進性」が描かれていることで、その意図にかかわらず、結果として「序列化」の力学を作動させてしまっているのである。文章中における地域区分とその関係の記述、各地域を記述する文章量の配分なども実は繊細な問題を含んでいるのであり、この点については筆者自身も慎重な態度で臨んでゆきたい。

(2) 北海道島

現在、縄文期の北海道島は、本州島以南とはことなる歴史を歩み始めた画期として評価されている。そして、この独自の歩みこそがアイヌの成立につながるがゆえに重視すべきである、とする論調が主流を占めている。しかし、こうした評価は、おもに3点において深刻な問題を抱えている。

第1は、遺伝的な系統性、民族としてのアイヌ成立といった問題が議論に取り込まれてきている一方で、考古学自身が果たすべき役割が見失われている点である。人類の遺伝的な特性は、ここでも極めて重要なデータであることに変わりはない。しかし、そこで系統性がトレースできるからといって(百々 1995, 石田 2001, Dodo and Kawakubo 2002など)、「縄文文化」とアイヌ文化の歴史的な因果関係が保証されるわけでは当然なく、これによって歴史的な産物であるアイヌ民族・文化の成立問題が解決されるわけでもない。同様に、資源利用形態や物質文化の系統性に連綿としたつながりがあったとしても、そのどの時点のどの部分がアイヌ文化の成立に関与したのかについては、考古学が説明すべき問題なのである。したがって、「弥生文化」とはことなる歴史の歩みを始めたという理由だけで、縄文期をアイヌ文化につながる歴史の出発点と位置づけてしまうのは(加藤 1992, 青野・大島 2003, 富樫 2003など)、歴史学としては手続きを欠いた議論といわざるをえない。また、循環論法に陥らないためにはアイヌ文化の規定にも十分な配慮が必要であり、判断の基準である近世～近代初期の物質文化などを時間的に遡及する手法が伴っている必要もあるのだが、縄文期の研究ではそうした例は皆無であろう。

第2に、縄文期にみられる「独自の歴史の歩み」が強調されているにもかかわらず、独自であることがなぜ積極的に評価しうるのかという理由がほとんど示されていない点である。北海道島では水稲耕作のような面倒なことを必要としないほどに資源に恵まれていた、などという説明はいまでも耳にする。だが、本州島以南においても食料資源の枯渇が水稲耕作導入の主要因とは考

えられていない現状では、これは北海道島に後進的な評価をあたえる余地を残す論理といわざるを得ない。

また、「漁撈活動への本格的な適応、本州文化との交流、あるいは以降の擦文文化・アイヌ文化へのドラステイックな展開が…(中略)…いっそうはっきりしてきている」(木村 2001, 1頁)のならば、たしかに喜ばしいことではある。しかし、物質文化の見た目からではなく、また縄文晩期社会との程度の差を無理に発展と読み替えるのでもなく、社会の質的な側面からこれを「動的」・「発展的」(木村 2001, 1頁)と評価しえるだけの確固たる研究成果はほとんどないに等しいのではないだろうか。だからこそ、「非文明」をめぐる不平等な枠組みがいまなお解消されてはいないのであり、本当の意味で縄文期に積極的な評価が与えられ、それが学界や社会に認知されてきているとはとても思えないのである。

それでもなお、独自の歩みが何とか肯定的に評価されようとしているのは、やはりアイヌとの関係が念頭におかれているからであろう。逆にいえば、アイヌとの関わりを根拠とする以外には、縄文期の北海道島を積極的に評価することができないのが実情なのである。「アイヌ文様」の起源として語られる後北式の文様が、それ以後も有機質資料にもちいられていた可能性は確かに否定できない(河野 1970)。だが、たとえそうした資料が見つかったとしても、それが物質文化上の連続性をこえて、ただちに縄文期の独自性と民族としてのアイヌ成立の間に働く直接的な因果関係となるわけではない。間接的には関わるといふ反論はあるかもしれないが、縄文期についても同じことがいえる以上、少なくとも縄文期の独自性を特別視する根拠とはならないのである。

このように、独自性が強調されながらも、独自であることがなぜ積極的な意味を持ちうるのか、という問題が掘り下げられていない現状には、やがて押し寄せてくるであろう全体性の論理に対する抵抗力が備わっているとは思えない。これまで明確な展望なく唱えられてきた独自性そのものが逆に差別の対象に転化してしまい、北海道島がふたたび「序列化の価値観」の波に飲み込まれるという皮肉な結果を招くことが危惧されるのである。

第3に、本当に縄文期からが独自の文化なのか、という根本的な問いかけも必要である。また、そうした議論が前提としてきた「縄文文化」、「弥生文化」や「縄文文化」という一体性を持った「文化」の存在そのものにも、疑問が投げかけられるべきであろう。「縄文文化」などという概念は、一国史の枠組みにちょうどよく納まるように創り上げられた「森林性新石器文化」(今村 1999)などの切り取り方のひとつにすぎず、本質主義的にはとらえられない。無論、「縄文文化」についても同じであり、この点に無批判なまま看板をかけかえる作業をしても(北方島文化研究会 2003)、何の意味もない。

一國史との関連では、「縄文」と「弥生」の理解が、依然として「日本」や「日本人」、そして「日本文化」の理解に直結するものとして取り扱われている点にも注意が必要である。日本列島東北部においては、とくに「縄文」と「東北地方」との部分的な関連性を強調することで地域ナショナリズムをあおり、「日本文化」、「日本国民」の存在を自明としたうえでその多系性が問われたり、アイヌ文化の歴史的な形成過程を無視して「縄文」とつなぎあわせたりする風潮には違和感をおぼえざるをえない¹⁾。擦文期やオホーツク文化期の十分な検討を経ないまま、「共通性」がみられることのみを根拠として縄文・続縄文期とアイヌ文化期を因果関係として結びつけることが許されるのであれば、考古学や歴史学は必要なく、発掘調査だけを行えばよいことになってしまうだろう。

ところで、北海道島の物質文化が、続縄文期から急に独自性が発現したわけではないことは、これまでの縄文期の研究からも明らかである。にもかかわらず、続縄文期の北海道島が、とりたてて「北海道文化」(加藤 1992, 青野・大島 2003)なるものの発露として評価されているのは、続縄文期の独自性を強調する意図を背景にした縄文期の歴史の隠蔽につながりかねない。同時に、続縄文期の北海道島との対照性を浮き彫りにするために、「東北地方」が「主な生業を畑作や稲作とすることで大和政権や律令国家の社会的・文化的枠組みに取り込まれてゆく」(青野・大島 2003, 27頁)と一括されている点は、「弥生文化」の実体視・均質視や本州島以南への一面的な評価の押しつけに繋がってくる点にも注意が必要である。さらに、明確な内容の規定を伴わない「北海道文化」の概念の提起自体が、先述の一國史や部分的な要素のアイヌとの接続などと同型の問題に陥る危険性も内包している。

続縄文期の北海道島は、単に独自性を唱えるだけでなく、遺物の変遷や分布をなぞるだけでなく、それ以前の北海道島や並行期の本州島以南などとの社会の質的な違いを評価してはじめて歴史的な意義が与えられることになる。狩猟・漁撈などの「伝統的」な活動であってもそれを支える原理や社会的な意味は個性的な変化をみせており(林 1997, 高瀬 2003a), 生産経済の導入と社会階層化が全く結びつかないなど、「文明」の「常識」だけではとらえきれない歴史も数多く眠っている。自らにとって「理解」し得ないものを拒絶したり、実力行使によって従わせたりすることは、ある意味で簡単である。しかし、それが真の問題解決にはならないことは現代のわれわれが経験していることでもあり、先史時代の評価についても同じことがいえるのではないだろうか。

3. 「非文明」の作法

(1) 「非文明」の姿勢

「非文明」と「文明」のあいだに横たわる優劣関係は自明なものではなく、「文明」の側が一方的に押しつけてきたものである。歴史的な価値として等価に対置された「非文明」と「文明」の関係史という地平から先史時代を眺望するためには、この点の認識が第一歩となる。「文明」の優越性や至高性は今後も簡単にはゆるぐわけではないだろうが、少数派や社会的弱者への風当たりが再び強くなり始めている近年の状況や、ナショナリズムの高揚に日本列島の先史時代像を利用する傾向も強くなっていることを考えると(中西2003), 先史考古学の「非文明」への接し方は、ますます試されてくると思われる。

ところで、「非文明」からの「文明」に対する異議申立ては、それを必要と感じる者が自発的に、それぞれのやり方でおこなうのが基本的な態度である。したがって、それは散発的かつ局所的にならざるをえないが、これも「非文明」の作法なので仕方がない。ここでできるのも、上記のような危機感をうけての筆者なりの提言でしかないが、これを個人レベルあるいは研究者集団レベルでどのようにとらえるかももちろん自由である。

筆者は、「文明」の存在を前提としている「非文明」という用語に、抵抗感が決してないわけではない。これに替わる案もいくつかあるが、まだ適切なものはうかんない。ただし、近代の成立そのものが「文明」と切っても切れない関係にある以上、その内部に生きる者は「文明」の存在を対象化することはできたとしも、あらゆる局面ですぐにはそれから自由になることもできないのであろう。すでに述べてきたとおり、ここで問題としているのは「文明」の存在そのものではなく、「文明」と「非文明」の内容および両者の関係の不当性である。そこでいかなる呼称をもちいようとも、それぞれの内容を本質主義的でないものへと改変し、同時に、両者の関係を一方的ではないかたちで評価するための手法開発こそが重要なのだと考える。よって当面は、小川英文氏(2000)のいう「非文明」という語を用いるが、いまは呼称の問題に多大な労力をかける必要も時間もないであろう。

「非文明」をとりあつかう姿勢としては、以下の2点が重要になる。第1点は、すでにふれたが、必然的に中央と周縁の図式をうみだし、同時に国民国家や国民の問題に絡め取られやすい一國史の枠組みとの距離のとり方を慎重に行う必要がある。日本の繁栄やその支配の根拠、また基層文化なるものがどこまで古く遡るのか、そして日本がいかにかしい発展を歩んできたのかを明らかにする目的に、先史考古学が貢献する義務や必然性があるわけではない。文化財保護法の文言や発掘調査への社会

的投資などの問題もあるが、これと考古学の役割を混同してはならない。一国史の枠組みを遵守しようとする立場を頭ごなしに否定するつもりもないが、少なくともそれが平等・公平性を維持した理解の障壁になることだけは認識したうえで議論をおこなう必要がある。

第2点として、「文明」に有利に仕組まれた論理に疑問を呈してゆく姿勢が必要である。「文明」の側からみた評価の一面性・偏重性などを明らかにし、増幅してゆく作業とともに(小川 2000)、「非文明」も長期間にわたって決して同じ状態に止まっていたのではなく、その内部のダイナミズムによって、また「文明」との関係によって、変化を遂げてきたことも明らかにしなければならない。

従来の図式的な理解においては、発展とは逆のベクトルと理解されてきた現象、たとえば遊動性の高まりや、生産経済から狩猟採集経済への変化、あるいは国家形成が生じない歴史変遷ですら、「文明」との関係などにおいていかなる機能を果たしていたのかを指摘してゆくことはすぐにでも可能である。遊動性の高まりは、対「文明」や「非文明」内において交易を生業とする集団にとっては効果的な居住形態であり、支配や搾取にさらされた集団にとってはそれから逃れるためにも有効に機能する。

定住こそが発展・進歩なのだとする考え自体が支配する側に都合の良いものであり、そうした「文明」の作法にとらわれているのは「非文明」に別の角度から光をあてることは難しい。「支配者集団の支配の手段としての方式ないしは研究者の認識と、各地域の現実とを混同させてはならない」(海保 1996, 265頁)のである。同じ現象でも多面的な評価が成り立ちうることを意識できるなら、過去表象を本質主義的ではないものへ修正しようとする方向性にも積極的に賛同できるだろう(梶浦 2003)。

このほか、「非文明」の歴史にみられた変化を、「文明」や自然環境など外的要因との関係でとらえうる可能性を模索すると同時に(沢 1974, 藤本 1979, 加藤 1992)、人びとがかかえていた社会的問題の解決手段として評価できる余地がないかを探ることも重要である。これによって、社会・経済・宗教上のあらゆる変化は、おのおのの地域に固有に存在した問題の解決手段という意味において、どの地域においても等価な性質を帯びてくる。発展を見いだすための重要な要素として考えられてきた生産経済や金属器の導入、生産・流通体制の複雑化などといった現象でさえも、地域に固有な問題への固有な対処方法であるならば、その内容をわざわざ優劣関係を持ちだして評価する根拠はなくなる。社会的問題・対処方法・結果の3者の関係が明らかにできているならば、それは単なる相対主義ではなく歴史的な根拠を伴った多様性論として展開してゆくことが可能となる。

変化を必然とするのではなく、その理由をさぐり、多様性が生じた要因を説明しようとする問題意識は、「非

文明」と「文明」を正当に評価するための骨格となる。そのため開発された手法は、たとえば低・高緯度地域の先史考古学のなかで共有してゆくことなどは有効と思われる。「非文明」研究が「団結」をする必要はまったくないのだが、周縁史や辺境史とはことなる歴史叙述という共通の課題を背負っているという意味においては、ある程度意識し合うことも必要かもしれない。

(2)「非文明」の手法

すでにふれたが、「文明」においては技術や物質文化がめまぐるしく変化し、古いものが新しいものに次々と置き換わってゆく。これに対し「非文明」では、そうした物質文化の変化も生じないわけではないが、系統的に同じものが長期間にわたって利用されることも頻繁にありえる。従来、こうした現象の扱いかたや研究手法の体系はまともな検討対象とはなっておらず、これが「非文明」の停滞的な評価を再生産してきた要因ともなっている。

「水稻耕作はやっていたかもしれないが、社会としては縄文期と同じである」、という本州島東北部の弥生時代の評価も、おもに石器組成や土器の漸進的な変化、住居の定性的な属性のみから導かれたものであった。だが、縄文期と同じ社会で、たとえば青森県垂柳のような同時期に少なくとも数haの拡がりをもつ水田を経営できたのか、住居の構造はおなじでも規模からみて縄文期と同じ居住単位が継続していたのか、などという定量的な側面にはまったく関心が払われてはいない。「文明」においては定性的な検討のみで十分なものであっても、「非文明」のばあいは定量的な側面を加味しなければ、不十分な評価になってしまうことには注意を要する。

同時に、モノとしての系統性がひとつつながりの物質文化であったとしても、それが最初から最後まで同じ機能を果たしているケースはむしろ稀である点にも配慮が必要である。日本列島内において銅鐸が朝鮮半島とはことなる社会的機能を付与され変遷をとげているのと同じように、縄文期の伝統もその長期的な変遷のなかでは社会的機能が大きく変化する(設楽 1999)。大陸系の磨製石器や木製農具がないからといって、また縄文期の道具組成が継続するからといって、機能・用途論的な分析をぬきにして縄文時代と実質的に変わらない社会が継続していたなどは簡単には言えないはずである。

石庖丁が分布しない本州島東北部北部では、剥片によってイネ科植物の収穫が行われていたと考えられ(須藤・工藤 1991, 高瀬 2002, 2004)、構造上は同じ住居であっても、居住者の規模や性質を検討すると縄文期と弥生期で違いがあったと考えざるを得ない(高瀬 1999, 2000)。逆に、日本列島西南部的な要素が日本列島東北部に分布していても、両者が同じような社会的機能をもつものかは、もちろんそれだけでは判らない。粗雑な剥

片石器が先史時代の土器や陶磁器にともなって出土するからといって(小川 2000), そこが長期間同じ状態に止まっていたなどということもいえないわけである。

ここから学び取るべき「非文明」の手法とは、定性的な分析とともに定量的な分析がともなっていること、そして、先入観が入り込みやすい系統・組成論とは独立して、機能・用途論的な考察をともなっていること、の2点である。これらは当然、「非文明」だけに特有なものではない。しかし、「文明」ではどちらか一方だけでよいものであっても、「非文明」ではこの両者がともなっていなければ誤った判断を誘発しやすくなってしまふのである。

(3)「非文明」と「文明」をこえて

地域固有の事情ではなく、構造論的な立場から、通文的とまではいかなくとも、より普遍性のたかい研究が一定の成果を収めることができるなら、「非文明」と「文明」の区分も不要となるかもしれない。しかし、これのみですべての問題が解決するわけでもない。

考古学は大きく分けて、編年などの基礎研究をもふくむ即物的な現象面把握からみた行為の復元と、それをもとにした目に見えない関係態をもふくむ解釈から成り立っているという点については大方の同意が得られるものと思う。考古学の範囲を前者のみに規定することもあるが、時間軸を視野に入れた歴史の評価をともなう学問の一分野としては当然、後者も考古学とされるべきである。たとえ考古学者が、みずからの学問範囲を前者に限定したとしても、その成果は研究者の意図に関係なく、より上位の歴史学に回収されてゆくことは間違いない。したがって、誰がどの部分を担当するかはべつとしても、後者をふくめて考古学とした場合と大差ない結果となる。

それはともかく、ここでの理解にもとづけば構造論的な分析法が有効なのは、前者においてである。この手法下では、特定のモノをめぐる行為がどのような秩序やルールにもとづいているのかが問題にされ²⁾、そのあり方自体はいかなる優劣関係も、特定の文化的意味ももたない冷たい存在である。そこでは当然、「非文明」や「文明」などという区分も基本的に意味をなさない。

行為の内容を豊富に復元することができるようになればなるほど、考古学は現代をフィールドとする文化・社会研究により近い条件のなかで考察を行うことができるようになる。しかし、現実の行為復元技術はきわめて未熟であることは認めざるをえず、現段階で考古学が構造論的な方法に依拠できるのはそのごく一部分でしかないだろう。またさらに、行為復元の技術が飛躍的に向上したとしても、現代を対象とする学問がいま抱えているのと同じ課題にぶつかることになり、構造論的な分析を縦横無尽に用いることができる文脈はかえって限定されて

くと思われる。したがって、これのみに依拠するわけにもゆかないのであり、「非文明」と「文明」の区分がすぐに不要になるという楽観論にも現段階では賛同することはできないのである。

おわりに

日本考古学が積極的に語り、注視してきた部分と、沈黙し、隠蔽してきた部分は表裏の関係にある。発展を語るということは同時に、停滞を生み出すことでもあり、後者は語られずとも地域差別という一定の評価を伴って厳然と存在してきたのである。差別とは、それをする側がされる側から何らかの利益を引き出そうとする行為であるが(柴谷 1998)、日本考古学によって引き出されるべき利益とは「日本の発展」にほかならない。小川英文氏(1998)が指摘しているように、国家や国民の優越性を示し、その神話を生成するという国民国家内部で与えられた考古学の役割が、こうした利益を引き出そうとする原動力になっている。

経済の規模縮小がすすむ近年の日本ではあるが、学術関連予算は例外的に増加傾向にある。それと引き替えに「競争原理の導入」や「予算の選択的な重点配分」もあたりまえとなりつつあり、政治的な権力が学問に介入できる余地も拡がり続けている。これからは、利益を引き出した、あるいは引き出そうとする研究に与えられる経済的・環境的優遇という政治性はますます露骨になってくるだろう。このような向かい風のなかであっても、変えるべき対象が明確にみずえられ、「非文明」からの声が絶えていないのであれば、目的は達せられた研究状況であると思っている。そのための努力を継続してゆきたい。

註

- 1)「縄文の本場、典型的な縄文の風土は東北だ…」、「弥生文化というのは、明瞭に大陸系の文化なんです。外国の影響のもとに日本文化が最初に大きく、言ってみれば渡来文化の影響のもとに転換するのは弥生文化からなんです」、「弥生というのは、大きな意味において日本における二千年前の近代化です」(傍線筆者)、という高橋富雄氏の発言もさることながら、対談でこの発言に接した赤坂憲雄氏が軌道修正するコメントすら加えていない点には首をかしげざるを得ない(赤坂編 2003, 264-265頁)。
- 2)ここでいう秩序やルールは、本来解釈されるものではなく、復元された行為やそのつながりのなかに立ち現れ、再現性をともなう理解されるものである。林謙作氏(1977)による縄文期墓制の分析や、安藤広道氏(2003, 2004)による弥生期以降の「世界観」の分析は、それ自体すぐれたものである。ただし、それらは解釈のモデルとしてレヴィ=ストロース以来の二項対立を応用したというべきものであり、ここでいう構造論的な検討とはことなる。

引用文献

- 赤坂憲男編 2003『日本再考 東北ルネッサンスへの序章』創童舎
- 安藤広道 2003「弥生文化の多様性と水田稲作」『縄文と弥生—多様な東アジア世界のなかで』37-42頁 大学合同考古学シンポジウム実行委員会
- 安藤広道 2004「装飾須恵器小像群の世界」『時空をこえた対話—三田の考古学—』135-140頁 六一書房
- 青野友哉・大島直行 2003「恵山文化と交易」『新古代の北海道』10-29頁 野村 崇・宇田川洋編 北海道新聞社
- 百々幸雄 1995「日本人の源像」『モンゴロイドの地球』3日本人のなりたち 129-191頁 百々幸雄編 東京大学出版会
- Dodo, Y. and Kawakubo, Y. 2002. Cranial Affinities of the Epi-Jomon Inhabitants in Hokkaido, Japan. *Anthropological Science* 110(1)pp. 1-32
- 藤尾慎一郎 2000「弥生文化の範囲」『倭人をとりまく世界』158-171頁 国立歴史民俗博物館編 山川出版社
- 藤尾慎一郎 2003『弥生変革期の考古学』同成社
- 藤本 強 1979『北辺の遺跡』教育社
- 林 謙作 1977「縄文期の葬制 第Ⅱ部遺体の配列, とくに頭位方向」『考古学雑誌』63-3 1-36頁
- 林 謙作 1997「続縄文文化の輪郭」『縄文から弥生への新歴史像』100-110頁 広瀬和雄編著 角川書店
- 広瀬和雄 1993「みちのく弥生文化論」『みちのく弥生文化』49-58頁 大阪府立弥生文化博物館
- 広瀬和雄 2003『前方後円墳国家』角川書店
- 広瀬和雄 2004「前方後円墳国家論序説」『文化の多様性と比較考古学』252-260頁 考古学研究会
- 広瀬和雄編著 1997『縄文から弥生への新歴史像』角川書店
- 北方島文化研究会 2003『北方島文化研究』1
- 今村啓爾 1999『縄文の実像を求めて』吉川弘文館
- 石田 肇 2001「続縄文人とオホーツク人」『シンポジウム北海道からの新視点 もう一つの日本文化—続縄文の人と文化を考える』37-41頁
- 石川日出志 2000「東北日本の人びとの暮らし」『倭人をとりまく世界』68-86頁 国立歴史民俗博物館編 山川出版社
- 伊東信雄 1979「東北の弥生文化—辰馬考古資料館開館記念講演—」『東北学院大学東北文化研究所紀要』10 1-12頁
- 伊東信雄 1984「青森県における稲作農耕文化の形成」『東北学院大学東北文化研究所紀要』16 1-26頁
- 梶浦泰久 2003「文化史的研究と考古学表象」『考古学研究』49-496-109頁
- 海保嶺夫 1996『エゾの歴史—北の人びとと「日本」—』講談社
- 加藤邦雄 1992「伝統文化と新来の文物」『新版古代の日本』9 東北・北海道 427-448頁 角川書店
- 木村英明 2001「続縄文文化の社会, 経済, 文化—北東アジア・北太平洋沿岸交易網への序章」『シンポジウム北海道からの新視点 もう一つの日本文化—続縄文の人と文化を考える—』1-12頁
- 野野本道 1970「アイヌ文様の起源」『被服文化』124・125, 39-45・70-77頁 文化出版局(再録: 河野本道編著 2001『装いのアイヌ文化誌』北海道出版企画センター)
- 近藤義郎 1966「弥生文化の発達と社会関係の変化」『日本の考古学Ⅲ弥生時代』442-459頁 和島誠一編 河出書房
- 中西輝政 2003『国民の文明史』扶桑社
- 榎垣佳男 1993「東北の弥生石器」『弥生文化博物館研究報告』2 149-170頁
- 榎垣佳男 1998「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』51-102頁 都出比呂志編 角川書店
- 松室孝樹 2004「文化財保護とナショナルイズム—私たちはナショナル・ヒストリーを打ち立てる必要があるのか—」『近江貝塚研究会論集 2 往還する考古学』53-57頁
- 新納 泉 2004「『前方後円墳国家論』雑感」『考古学研究』51-11 4頁
- 小川英文 1998「考古学者が提示する狩猟採集民のイメージ」『民族学研究』63-2 192-201頁
- 小川英文 2000「狩猟採集社会と農耕社会の交流: 相互関係の視角」『交流の考古学』266-295頁 朝倉書店
- 岡安光彦 2001「小オリエンタリズムとしての『東国史観』」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』100-1-3頁
- 佐原 真 1975「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本歴史』1 113-182頁
- 沢 四郎 1974「縄文文化から続縄文文化へ」『新釧路市史』1 217-247頁
- 柴谷篤弘 1998『比較サベツ論』明石書店
- 設楽博己 1999「黥面土偶から黥面絵画へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』80 185-202頁
- 須藤 隆 1998『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』纂修堂
- 須藤 隆・工藤哲司 1991「東北地方弥生文化の展開と地域性」『北からの視点』97-114頁 日本考古学協会1991年度宮城・仙台大会 実行委員会
- 高瀬克範 1999「東北弥生社会の住居と居住単位」『古代文化』51-9 1-18頁
- 高瀬克範 2000「東北地方における弥生時代前・中期の集落」『物質文化』68 16-31頁
- 高瀬克範 2002「東北地方北部弥生時代の『スクレイパー』類について」『石器使用痕研究会会報』2 6-7頁
- 高瀬克範 2003a「日本列島東北部における弥生・続縄文期の食料 資源利用」『縄文と弥生 多様な東アジア世界のなかで』51-56頁 大学合同考古学シンポジウム実行委員会
- 高瀬克範 2003b「岩木川流域における縄文時代晩期~弥生時代の遺跡群」『海と考古学』6 53-72頁
- 高瀬克範 2004『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房
- 富樫泰時 2003「続縄文文化」榎森進編『アイヌの歴史と文化』I 4-13頁 創童舎

【高瀬克範, 連絡先: 東京都立大学人文学部・東京都八王子市南大沢1-1】

**The Etiquette of the “Uncivilized”: Prehistoric Research
in the Northeast of the Japanese Archipelago**

Katsunori Takase

In prehistoric research, a view that evaluates the relative merits of diachronic as well as synchronic diversity has a strong probability of remaining even if it does not reveal the past. There are always regions that do not fit such evaluations and it is still a major unresolved problem as to how one should consider the history of such regions while excluding prejudice, discrimination and one-sided interpretations. Here I summarize an etiquette for discourse on the “uncivilized” and note points that differ from research on “civilization”.

The first point in approaching the “uncivilized” is how to distance oneself from the framework of the history of a particular nation. Furthermore, against the wide acceptance of a history centered on “civilization”, a critical stance is needed which questions theory that only fits with “civilization”. Without such a stance, it is very difficult to derive a fair historical interpretation of the “uncivilized” which is buried in a viewpoint centered on “civilization”.

When considering the “uncivilized”, it is important to pay sufficient attention to the quantitative as well as the qualitative aspects of material culture, and to derive interpretations not based on the genealogy of objects, but which include analyses of practical and social function within each location and chronological stage. Such analyses can also be used for “civilization”, but it is particularly important to take sufficient care to consider them when examining the “uncivilized”.

Key words: Yayoi, Epi-Jomon, northern Japan, civilization, historiography